
インスタレーション・アートの空間性を再構成する——4つのトポス

大岩雄典 (多摩美術大学)

インスタレーション・アートは「空間的」な芸術と呼ばれる。だがこの「空間」の指すところは、物理的な広がり、作品が展示される場(サイト)、鑑賞者が感じる現象学的な経験、意味論的な閉合性など、しばしば曖昧かつ文献ごとに偏向しており、総合的な概念分析はなされていない。

Celant(1975)やRosenthal(2003)はインスタレーション・アートの空間性の分類を試みたが、要素が不足している、あるいは過剰であるために、一般的な形式的記述として十分に成功していない。さらに、2010年代以降に大きく展開した、保存修復(コンザベーション)の視点からのインスタレーション・アート研究は、実用的利点にとどまらず、美学的・哲学的に関心深い観点が提示されているにもかかわらず、従来の研究と十分に知見を交換できていない。

本発表は、(1)Petersen(2009)が素描した「多義的な空間性」を洗練し、特にSaaze(2013)やScholte(2022)の保存修復的知見を反映することで、インスタレーション・アートにおける「空間」の概念的な多義性を整理する。具体的には、①コンポジション、②シチュエーション、③サイト、④ミュージオロジーという四つの「トポス(空間性)」に分けた理解を提案する。(2)これをもとに、従来インスタレーション・アートと関連づけられてきた多くの概念や問題(サイト・スペシフィシティ、日常生活との接続、ファウンド、状況、インタラクティビティ、演劇性、制度批判、インストラクション……)の相互関係を明快に示す。この達成は、具体的な作品の記述・分析はもちろん、評価や教育、キュレーション、展覧会設営などあらゆる場面の共通言語として有益である。

はじめにトポス同士の抽象的関係性を示す。結論を示せば、インスタレーション・アートの空間性は次のように説明できる。まず慣習的な形式的基準によって同定される「①コンポジション(構成)」がある。①によって画定された領域に鑑賞者が身体・心理・行為において参加し、動的に探索する。この空間を「②シチュエーション(状況)」と呼ぶ。この探索において鑑賞者は、当の作品の、物理的ステータスに還元できない全体性を、外的条件(物理的環境、その土地、言説)と関係づけて意味論的に理解する。この内外関係を「③サイト(場)」と呼ぶ。本発表はさらに「④ミュージオロジー」を加える。キュレーション・市場・テクニカルサポート・保存修復など芸術家以外のエージェンシーとのやりとりを通じて同定される作品の側面を取り上げる。この観点は、意図論はじめ芸術の哲学に貢献し、また、先進技術を用いた作品や、このジャンル特有の問題である再展示・再制作の分析にも有用である。

後半では各トポスについて、具体的な作品例を挙げて説明する。